

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02537

研究課題名(和文)「星野君の二壘打」の総合的研究

研究課題名(英文)A comprehensive study of "Hoshino's double"

研究代表者

柳澤 有吾 (Yanagisawa, Yugo)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：90275454

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：令和2年度末には、書籍『「星野君の二壘打」を読み解く』(全174頁)をかもがわ出版より刊行し、日本教育新聞電子版の書評掲載のほか朝日新聞等でも取り上げられた。令和4年度末に研究成果報告書(全149頁)を作成・配布し、主要部分については専用HPにも掲載した。また「犠牲の論理」としての兵役を論じた論文「ウクライナ支援が意味するもの 戦争倫理学の一視角」が『唯物論研究』に掲載された。期間延長後の令和5年度は、日本平和学会で口頭発表「問い直される(非)暴力 ウクライナ戦争から考える」を行うとともに、論文「『ギセイ』と『犠牲』 ドイツにおける兵役制度をめぐる議論から考える」を専用HPに掲載した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教育学のみならず、歴史学、心理学、哲学・倫理学など複数の視点から多角的かつ総合的にアプローチすることによって、従来の「星野君の二壘打」像を更新・拡張するとともに、そこに典型的な仕方で表れている道徳教育や道徳的諸価値の捉え方、道徳性に関する見方、人間像、あるいは原作の扱い方などの問題性と課題を剔抉し、道徳教育の転換に向けた展望を拓くことを目指すところに本研究の意義があり、『「星野君の二壘打」を読み解く』や研究成果報告書の刊行や、それが書評や各種メディアで取り上げられたことにより、その目的は一定達成できたと考えられる。

研究成果の概要(英文)：At the end of FY2020, the book Interpreting Hoshino-kun's Double (174 pages in total) was published by Kamogawa Publishing. The book was reviewed in the online edition of the Japan Education Newspaper, and was featured in the Asahi Shimbun and other media. At the end of FY2022, a report on the research results up to that point (149 pages in total) was compiled and distributed, and the main part was also posted on a dedicated website. In addition, the lead researcher wrote a paper entitled "What Support for Ukraine Means: A Perspective on War Ethics," which discussed military service as the "logic of sacrifice," and was published in Materialist Studies. In FY2023, he gave an oral presentation at the Japan Association for Peace Studies entitled "Rethinking (Non)violence: Thinking from the Ukraine War," and posted a paper entitled "'Gisei' and 'Sacrifice': Thinking from the Debate on the Military Service System in Germany" on the dedicated website.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：「星野君の二壘打」 道徳教育

1. 研究開始当初の背景

「星野君の二塁打」は代表的な道徳教材としてきわめて多くの実践に用いられ、また関連雑誌などでもしばしば取り上げられていたものの、そこでの扱いは「指導の手引」に則ったものがほとんどであった。宇佐美寛による批判など、異論がまったくなかったわけではないが、近年に至るまで、宇佐美の批判を正面から受け止めた議論らしい議論は皆無に等しい。まして作者である吉田甲子太郎の子ども観や作品執筆時の社会的・歴史的状況、「星野君の二塁打」が当初の国語教材から道徳教材へと移行したことの意味、国語と道徳との違い、「物語」というメディアが有する力の特性やそれを用いる際に留意すべき点、より広い発達の文脈からこの物語が求めているものを位置付ける作業などは、ほとんど試みられなかった。この欠落を埋める必要を感じたことが本研究の発端である。

2. 研究の目的

「星野君の二塁打」は1952年に国語の教科書に掲載されて以来ずっと教材として用いられてきた。1964年には道徳資料集にも採録され、道徳が「特別の教科」として位置付けられるようになってからも複数の教科書に掲載されている定番の道徳資料である。定番教材が有するとされる「力」について批判的に考察し、その可能性や課題を明らかにすることは一般的な課題としても重要であるが、「星野君の二塁打」の場合には、そのお話がとくに議論を呼んだ特殊事情がある。世間の耳目を集めた2018年5月の日大アメフト部危険タックル問題との関連で、道徳教材としての「星野君の二塁打」はとくにインターネット上で盛んに論じられることとなった。アメリカンフットボール部の選手による危険なタックルという反則行為は選手と監督との権力的関係のもとで起きた問題であるとの報道を受けて、監督に盲従する選手を肯定的に描いたと見なされた「星野君の二塁打」は激しいバッシングの対象となったのである(そのプロセスのなかで一部ではオリジナル版と教科書版の違いも取り上げられたが、人々の認識を大きく変えるには至っていない)。

しかし、時事的な問題との関連性だけが「星野君の二塁打」を論じることの理由ではない。そもそも、時事的問題において引き合いに出されるのも、そこにおいて選手あるいは子どもたちの主体性や自主性、集団と個人の関係、権威主義などの問題が鋭く問われていたからに他ならない。こうした根本的問題を論じるにあたって、従来為されてきたような特定の角度からの検討たとえば道徳教育なら道徳教育という単一の視点 だけでは限界がある。本研究は、教育学のみならず、哲学・倫理学、心理学、歴史学など多方面から、多角的かつ総合的にアプローチすることによって、従来の「星野君の二塁打」像を更新するとともに、そこに典型的な仕方では表れている道徳教育や道徳的諸価値の捉え方、道徳性に関する見方、人間像、あるいは原作の扱い方などの問題性と課題を別決し、もって道徳教育の転換に向けた展望を拓く一助となることを目指すものである。

3. 研究の方法

国語の教科書や道徳の副読本・資料として用いられてきた「星野君の二塁打」であるが、既述のように最初は少年雑誌の読み物として刊行されたもので、現在も文学作品として読まれ続けている。こうした状況も踏まえて、本研究は以下のような観点から取り組む。

(1) 教育学的観点からは、「文学」、「国語」、「道徳」の違いは何か、それぞれの関係性について検討を加える。「星野君の二塁打」の詳細な分析のうえに、文学、国語、道徳の相違点・関係性とその諸相を明らかにすることを試みる。小説や文学が教育現場で用いられるときには、個人で文学作品を読む場合等と違った状況が立ち現われる。教育の場面で子どもが文学と出会うとき、文学は作者の意図を離れたところで、教師や教科書等を媒介として、「教育的意図」とともに子どもに伝達される。「教育」という枠組みの中で文学はどのように変容する/あるいは変容しないのか。文学と教育があわさるとき、何が生まれる/あるいは生まれないのか、吟味する(米津美香担当)。

(2) 心理学的観点からは、物語による青少年の社会的アイデンティティや職業意識形成から考える。すなわち、まず「物語」についての心理学研究をふまえて、「星野君の二塁打」を一種のキャリア小説として読み解く。そして、「倫理」を精神的な幸福につながる生き方として捉え直したうえで、「学び」を社会参加の過程として位置付け、そこでの個の在り方とケアおよびサポートとしての教育について論じていく。その際、アイデンティティ概念について再吟味し、ケアを根源とする社会について考察するうえでは、とくにエヴァ・フェダー・キテイの正義論を参照しつつ、論じていく【その後、「犠牲」の概念を軸に、共同性を中心とする議論へと軌道修正が行われた】(天ヶ瀬正博担当)。

(3) 歴史的観点からは、「星野君の二塁打」の誕生について論じ、「星野君の二塁打」執筆(1947年)以前の吉田甲子太郎の少年小説および少年小説論における、「星野君の二塁打」の創作に繋がる諸契機を探る。「星野君」へとつながる「少年」像、大人と子どもの関係、「罪と罰」あるいは「反省と成長」といった主題について検討する。また、吉田甲子太郎が道徳教材としての「星野君の二塁打」について解説を書く1952年まで対象時期を拡大して、文部省著作教科書『民主主義』(上巻1948年、下巻1949年)と関連させて検討することも、戦後民主主義教育を振り返る意味で重要になるはずである(功刀俊雄担当)。

(4) 哲学的・倫理的観点からは、道徳教材としての「星野君の二塁打」を論じる外在的視点・内在的視点の双方を明確化したうえで、両者を媒介する第三の視点を確立することを企てる。道徳の教科化と日大タックル事件をきっかけにマスメディアで盛んに取り上げられた「星野君の二塁打」であるが、権威主義的監督像を前提に星野君の出場停止処分を「行き過ぎたパワハラ」と断じるなど、その議論はほとんどが外在的なものであった。吉田甲子太郎の原作はもとより教科書版に照らしてみてもそれが妥当な読み方でないことは研究代表者が本研究に先立つ論考で明らかにしたことである(柳澤2017)が、内在的視点と外在的視点との媒介を図り、両者を見通した観点から「星野君の二塁打」が前提する価値観、人間像、社会観を評価し、その可能性と限界について見極める必要がある(柳澤有吾担当)。

4. 研究成果

(1) 主たる研究成果：

功刀俊雄・柳澤有吾編著『「星野君の二塁打」を読み解く』(かもがわ出版、2021年3月)

第1章 星野君はどんな少年だったのか (功刀俊雄)

第2章 文学と教育があわさるとき (米津美香)

第3章 道徳の再構築に向けて (天ヶ瀬正博)

第4章 開かれた物語としての「星野君の二塁打」 (柳澤有吾)

資料 「星野君の二塁打」(初出版)全文

令和2年度～令和4年度研究成果報告書(2023年3月)所収の論考および資料

道徳教材：ペープ・ルースの「三のライナー」の誕生—子ども向け犠牲バント物語のルーツを探る—(功刀俊雄)

学校教育における文学と人間形成—1950年代後半における道徳教育論争を参照点として—(米津美香)

「星野君の二塁打」から日本の文化的・社会的課題へ—読者のコメントの分析とペープ・ルースの逸話“George Gets a Big Hit”との比較を通して—(天ヶ瀬正博)

討議倫理学から見る道徳教育の展望と課題(藤井佳世)

『星野君の二塁打』から広がる世界(有川淳一)

「星野君の二塁打」の現在(柳澤有吾)

資料：現行の道徳教科書の「星野君の二塁打」テキスト比較

「星野君の二塁打」の初出版と定本版の比較

「星野君の二塁打」年表

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト、今後の展望：

従来の「星野君の二塁打」研究に対して本研究を際立たせる特徴は、その多視点的・多角的なアプローチにあるが、当該作品のこれまで注目されることのなかった豊かさに光を当てるとともに、当の物語ないし教材の孕む問題性についても、これまでとは別の角度から明らかにした点も重要である。「星野君の二塁打」を読み解く』でいえば、作品のルーツを探るとともに「星野君」をひとつの少年像として捉え直すことや、教材としての「星野君の二塁打」を文学と教育の出会いとみると同時にそこに生じうる歪みに注目すること、「犠牲」概念に注目して近代的道徳論から現代的なそれへの転換を批判的観点から示すこと、あるいは、この物語を人格の出会いと変容の物語として読み直す可能性を追究することなどが挙げられる。

こうした点は反響にもあらわれており、たとえば日本教育新聞の書評には「4人が異なった分野から一つの作品を読み解くという興味深い取り組みをまとめた内容である」とある。また、当該教材が道徳の教科化や日大タックル事件との関連で世間の耳目を集めたということとどまらず、その読み方における一面性を指摘する動きが一般の論調においても徐々に見られるようになったことは、本研究の礎を築いた功刀俊雄の長年にわたる研究の功績であるとともに、本研究の多面的考察が一定の波及効果を及ぼした成果と言える。同様のことは、本研究報告書所収の諸論考に関しても期待される。後者にはとくに詳細な資料編を付したことによって、これまで総じてルーズな形で扱われていた「星野君の二塁打」のもろもろのバージョンの違いが一目瞭然となっており、こうした教材研究を行ううえでのひとつのモデルを提示したということもできるであろう。

道徳教材としての「星野君の二塁打」は今回の教科書改訂で突然の終焉を迎えることになったが、研究報告書でも確認したように、それは本研究の意義が失われることを意味しない。一般的に言って、道徳教材研究上の方法論的な意義は当該教材がどれほど継続的に利用されているかには依存しないということもあるが、それだけではない。「星野君の二塁打」は教科書から消えても、規則の遵守や集団生活の向上といった項目そのものは消えることはなく、どこまでも課題

であり続ける。問題としての「星野君の二塁打」は残り続け、「星野君の二塁打」的なものほど
こかで、また別の形で出会われざるを得ないのであるから、今後の課題としては、同様の内容項
目に即して他の道徳教材の分析・検討を行うことによって、本研究の到達点と残された課題につ
いて再考することが必要になるであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 柳澤有吾	4. 巻 第161号
2. 論文標題 ウクライナ支援が意味するもの 戦争倫理学の一視角	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季報 唯物論研究	6. 最初と最後の頁 48-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 柳澤有吾
2. 発表標題 問い直される（非）暴力 ウクライナ戦争から考える
3. 学会等名 日本平和学会 2023年春季大会 非暴力分科会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 功刀 俊雄、柳澤 有吾	4. 発行年 2021年
2. 出版社 かもがわ出版	5. 総ページ数 176
3. 書名 「星野君の二塁打」を読み解く	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「星野君の三皇打」の総合的研究
<http://www.kinet-tv.ne.jp/~yyanagi/hoshinokun.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	天ヶ瀬 正博 (Amagase Masahiro) (00254376)	奈良女子大学・人文科学系・教授 (14602)	
研究分担者	米津 美香 (Yonezu Mika) (50735446)	奈良女子大学・人文科学系・助教 (14602)	
研究分担者	功刀 俊雄 (Kunugi Toshio) (70186427)	奈良女子大学・人文科学系・教授 (14602)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------